「授業備品」N068 H.30.9.5　**自分見直し**

多くの学校は、校長が示す学校経営方針に教職員が賛同し、一枚岩となり授業改善を進めている。だが、まだ従来と同じ知識注入型の授業を続けている学校もある。「授業に困り感」がない教師たちだ。アクティブな授業へ変えないと、将来を生きる子供たちが困ることに気付いていない。こうした事が起こる原因を整理した。

授業が変わりきれない背景

学校には長い間に培われてきた伝統のようなものがある。すべてに今までこうやってきたからという発想ですべての教育活動進行してきた。授業も同じだ。何の疑問をもたずに同じことを繰り返していたと思う。そこには、生徒の意見を取り入れる余地が少なかった。特に授業は「個業」で行うという意識が教師には根強くあったと思う。学校の中に小さな学校がいくつもあり、いまだにそうしたことが解消しきれていないのかもしれない。

「まだ教えてやる」？

授業というのは生徒にっとっては「学習」のことだ。生徒が自ら学び、学び方を身に付けるような活動が、新学習指導要領では最も大事なことだ。多くの教師はこのことに気付いている。だが、「まだ教えてやる」という意識を持つ教師もいる。その典型的な形が教師主導型だ。そのため、生徒は受け身的な学習を強いられる。教師がたくさん話すほど生徒の学ぶ意欲がそがれ、単語しか話さないようになる。断片的な知識を一方的に注入する型の授業であるからだ。

解決策は、教師の教えてやるという意識をなるべく抑え、生徒に学習を委任する意識を持つことが何よりも重要だ。教師が「なるべく話さない」という姿勢に向かうをことで子供は主体的に学ぶようになる。それが可能となった時、教師が一人ひとりの生徒の個性（よさ）を引出し、それを伸ばせるようになれ。

教科書を教えるだけでいいのか？

授業は、１時間毎に目標があり、その目標を達成するように進められる。その授業目標は単に知識・理解だけであってはならない。新学習指導要領は、「主体的・対話的で深い学び」の学び方を学ぶ目標が大きく掲げられた。だから授業は、多様な目標のもとに進められなければならない。単に教科書に書かれていることを理解させればよいということではない。教科書は一つの教材に過ぎないからだ。多角的に授業の準備を進めるためにも、「授業のキーワード」「キーワードは３回旅をする」「ホワイトボード」等の授業ツールも用意すべきである。

声は大きければよいというものではない

学校を訪問すると、授業のよさが教師の声の大きさですぐ分かる。教師より生徒の学ぶ声が聞こえる響いている学校だ。だがそうした学校はまれで、多くの教師がしゃべりすぎる授業が多い。特に大声で話す教師が気になる。その教師はいいかもしれないが多くの生徒や他の教師にとっては迷惑なことだ。

声は大きければいいという物ではない。１時間にわたり教師の声を聞かされる生徒の身にもなってみよう。よく我慢をしていると思う。大きすぎる声は、話す方はそれでよいかもしれない。だが聞方にとっては疲れるものだ。教室は、教師がそんなに大きな声を出さなくても、聞こえるものだ。どのくらいが適切な声か、考えるとよい。それも生徒に一度尋ねてみるとよい。大きい声がいいかどうかを。

一人のスーパーティーチャーより全教師が活躍する学校

変化の激しい現在、学校はかつてのように名人芸に近い授業をする人が集まり授業をする時代は終わった。特に、教師は「自分は自分のやり方で授業をする」という個人プレーは、現在ではかなり制約されている。学習指導要領総則の基準に記述されたチーム学校、ユニバーサルデザイン等を行うことを遵守することを求められているからだ。

全員活躍の授業

在籍した東京の学校では「生徒参加型授業」を目指していた。だがそれでも教師主導の授業から抜け切れなかった。当時は、生徒が参加している授業だけで満足していたからだ。だが、考えて見ると授業が分かりにくい生徒にとっては、他人から支援された授業だったと思う。新学習指導要領の生徒が「主体的・対話的で深い学び」は、生徒が授業を創る能動的な学習であるので、「全員活躍」を大切にするとよい。